

平成二十七年 度

神奈川県公立高等学校入学者選抜学力検査問題

共通選抜 定時制の課程

Ⅱ 国 語

注 意 事 項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題は 問四 までであり、1 ページから12 ページに印刷されています。
- 3 答えは、解答用紙の決められた欄らんに、はつきり書き入れなさい。
- 4 解答用紙にマス目（例：


）がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と読点などを一緒に置かず、読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。
- 5 終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受 検 番 号

番

問一 次の問いに答えなさい。

(ア) 次の各文中の——線をつけた漢字の読み方を、ひらがなを使って現代かなづかいで書きなさい。

1 注文した品物が宅配で届けられる。

2 卒業にあたり記念品を贈呈する。

3 連絡の行き違いを陳謝する。

4 あまりの寒さに全身が凍える。

(イ) 次の各文中の——線をつけたカタカナを、漢字に直しなさい。(楷書で大きく、丁寧に書くこと。)

1 国王の政治はミンシユウの支持を受けた。

2 工場で菓子をセイゾウする。

3 演奏の腕前がエンジユクの域に達する。

4 互いの力を認め合い信頼関係をキズく。

(ウ) 次の各文の□にはすべて同じ漢字一字が入る。その漢字として最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

丁寧な解説に□得する。

出□係になる。

品物を□入する。

税金を□める。

1 収                    2 納                    3 貯                    4 集

(エ) 次の文中の□に入れる敬語表現として誤りのあるものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

先生が卒業式で私たちに□内容がいまだに忘れられません。

1 申し上げた                    2 お話しになった

3 おっしゃった                    4 話された

(オ) 次の文章中の□に入れることわざとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

文化祭で書道部の作品を展示することになった。会場の装飾について考えていたところ、華道部から合同展示の申し出があった。まさに□だと思った。

1 漁夫の利

2 まな板の鯉こい

3 渡りに船

4 立て板に水

(カ) 次の文章は、ある古典文学作品について説明したものである。その古典文学作品として最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

「月日は永遠にとどまることのない旅人のようなものであって、過ぎ去っては新しくやってくる年もまた旅人である。」という内容の文章が始まる江戸時代に書かれた紀行文であり、東北や北陸などを経て大垣（岐阜県大垣市）に至るまでの旅行中の出来事が記されている。

1 枕草子まくらのそうし

2 おくのほそ道みち

3 土佐日記とさにつき

4 平家物語へいけものがたり

(キ) 次の俳句を説明したものとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

吊革つりかわのどの手しごても仕事しごはめ始はかな

永作ながさく 火童かどう

- 1 これから一年の仕事が始まるという日の朝、電車内で吊革を握りしめて通勤する人々の手を見て、どれも苦労を重ねたような手をしていることに哀れみを感じている。
- 2 これから一年の仕事が始まるという日の朝、電車内で吊革を握りしめているいくつもの手を見て、毎日長距離通勤で仕事に向かう人々の疲労の蓄積を感じ取っている。
- 3 これから一年の仕事が始まるという日の朝、電車内で吊革を磨く仕事をしている人々の手を見て、巧みな技能と機敏な動きに専門職ならではの誇りを感じ取っている。
- 4 これから一年の仕事が始まるという日の朝、電車内で吊革を握りしめている人々の手を見て、それぞれの家族や生活を守るために職場へと向かう力強さを感じている。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「北見二中」に入学した「千鶴」は、体育系の部活動に入りたいと思い、どの運動部に入ろうかと友人の「しほりん」とともに考えてみたが、なかなか決めることができないでいた。

考えるほどに、千鶴は自分にびたつとくる部活なんてどこにもない気がしてきた。もともと、運動自体、あまり得意ではないのだ。

それでも千鶴が体育系の部活にこだわったのは、「変わりたい」の一心からだ。ここで文化系の部活を選んでしまったら、このさきもずっと、自分はこれまでとおなじレールの上を走りつづけることになる。

新しいわたし。いままでとはちがうわたし。部活は、そんな自分に生まれ変わる最大のチャンスなのだ。

そう思いながらも、足をふみだす方向が定まらずにいたある日の放課後、吹奏楽部の見学につきあつてほしいと、千鶴はしほりにたのまれた。

「ひとりじゃ行きづらくて。お願い。」

「もちろん。」

北見二中の音楽室は、本校舎からはなれた別棟の北校舎にある。わたり廊下の窓ごしに中庭を見おろしながら進むと、本校舎の喧噪や床の震動が次第に遠のいて、しんとした静けさに包まれていく。

音楽室の戸を開けた瞬間、その静寂をゆさぶる音がした。足もとからはいあがつてくる低音。それがクラリネットの音色であることに、千鶴は室内を見まわしてから気がついた。

クラリネットだけじゃない。机を前方に積みあげてスペースを空けた室内には、想像以上に多くの部員がいた。トランペット。フルート。打楽器。それぞれのパートごとに練習している。部屋のあちこちからひびく多彩な音。その音と音とがからみあい、もつれあい、不協和ながらも重層的な音のかたまりを生んでいる。

「見学?？」

教室のすみで新入部員の指導をしていた顧問の先生が、千鶴としほりに気がついた。

ベーターヴェンみたいな髪 of 男の先生。

「あ、はい。」

「よろしくお願いします。」

あわてて頭をさげたふたりに、「入っておいで。」と手まねをする。ふたりが足をふみいれるなり、先生はぱんと両手を打って部員たちに呼びかけた。

「一年生が来たから、ちょっと聴かしてやって。」

たちまち、パートごとの小さなかたまりがほぐれ、教室の中心に全員が集まった。先生の指揮棒にたぐられて、その大きなかたまりから蒸気のようにメロディが立ちのぼる。最初はふんわりと。ひとつ、またひとつと音が増え、メロディがふくらむ。ふくらむ。ふくらむ。ひとりひとりのかなでる楽器が、重なることでその音色を深め、引きたて、美しいハーモニーを育てていく。

砂浜の波が引いたあとで足もとの砂がすつと動くみたいに、千鶴の心は音のほうへと引きよせられた。

3 曲が終わったときにはすつと感動していた。なんの曲かもわからない。上手な感想だつてひとことも言

えなかったけれど、ベートーヴェン先生は「またおいで。」と笑ってくれた。

「なんか、すごかったよね。」

「うん。すごいよね、吹奏楽部。っていうか、中学生ってすごい！」

「ほんと、レベル高かった。小学校の鼓笛隊なんて目じゃないね。」

「目じゃない、目じゃない。」

「うちらも練習したらあんなふうになれるのかな。」

帰り道、ふたりのテンションは高かった。千鶴の感動がしほりに、しほりの興奮が千鶴にのりうつり、ふたりしてどんだん高まっていくみたいに。

「決めた。あたし、吹奏楽部に入る。千鶴もやろうよ。」

しほりに誘われるまでもなく、千鶴の気持ちも吹奏楽部へかたむいていた。

放課後の音楽室にいる自分を、千鶴はたやすく想像できた。すぐに上達するほど器用じゃなくても、はじめに練習をつんで、着実に成長していく自分。仲間や先輩たちともそれなりにうまくやっていく。あり<sup>4</sup>ありとイメージできる。できすぎる。

「あのね、わたし……中学生になったら、変わりたいって、思ってたんだ。」

千鶴は初めてしほりに打ちあけた。

「いままでとはちがう自分になりたくて。吹奏楽部は、すごくいいと思うし、すごくやってみたい。でも、それじゃ、いままでのわたしといっしょって気もして……。」

うまく言えない。じれったくだまりこむ千鶴の横顔を、しほりんがじっと見つめている。千鶴が本気のとき、しほりんはいつもおなじくらしいの本気で、なにかを返そうとしてくれるのだ。ちょうどいい言葉が見つからないときには、見つかるまでずっとだまっている。

けれど、この日は早かった。

「うん。」

胸もとのスカーフをのぞきこむように、しほりんはこくんとうなずいて言ったのだ。

「わかるよ。千鶴の気持ち。」

「え。」

「あたしも、そんなふうにいることあるし。」

「しほりんも？」

「うん。でも、それでもあたし、千鶴は千鶴らしいことをしたほうがいいと思う。」

「そうかな。」

「わざと自分らしくないことをするより、千鶴は千鶴らしいことをして、いままでの千鶴以上にそれをがんばって、そのさきに、いままでとちがう千鶴がいるんじゃないのかな。」

千鶴は千鶴らしいことをして、いままで以上にそれをがんばって、そのさきに、いままでとちがう千鶴がいる――。

千鶴はその言葉を吸いこんだ。とたん、夕焼け空が朝焼けみたいに光りかたを変えた。

「うん。そうかも。そうならいいな。」

すうっと肩から力がぬけた。

「ありがとう、しほりん。わたし、決めた。明日、仮入部届けもって、ヴェンに会いに行くよ。」  
「あたしもヴェンに会いに行く。」

「わたしのヴェンに？」  
「あたしのヴェンだよ。」

顔を見合わせたふたりの笑いがはじける。いきおいあまって千鶴が駆けだすと、しほりんが「待てーっ。」と追ってきた。

(森<sup>もり</sup> 絵都<sup>えと</sup>「クラスメイツ〈前期〉」から。一部表記を改めたところがある。)

(注) 喧噪<sup>けんそう</sup>＝人の声や物音で騒がしいこと。

(ア) —線1「このさきもずっと、自分はこれまでとおなじレールの上を走りつづけることになる。」とあるが、このように思ったときの「千鶴」を説明したものととして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 運動が得意ではないからといって文化系の部活に入ってしまったのは、今までは違う自分になるせつかくの機会を失ってしまうと思っている。

2 「しほりん」と同じ部活に入ってしまったのは、ついつい友人に頼ってしまうことになり、今までは違う自分になれないと不安になっている。

3 体育系の部活に入りさえすれば、これまでと同じ自分のままでいられるので、中学校でも今までどおり楽しく過ごすことができると安心してている。

4 自分にぴたつとくる部活が見つからないのであれば、いっそのこと悩まずにこれまでと同じ文化系の部活に入ってしまうおうと思っている。

(イ) —線2「音楽室の戸を開けた瞬間、その静寂をゆさぶる音がした。」とあるが、これについて説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 わたり廊下の静けさと音楽室を対比して、吹奏楽部が学校内で目立っていることを表している。

2 音を聞いた瞬間に、吹奏楽部に対する「千鶴」のイメージが大きく変わったことを表している。

3 音楽室から響く多彩で重層的な音によって、「千鶴」が強い印象を受けたことを表している。

4 「瞬間」という表現で、「千鶴」が迷いなくすぐにでも入部しようと決断したことを表している。

(ウ) —線3「曲が終わったときにはすっかり感動していた。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 全員で演奏することによって、自分が気に入った楽器の音だけが耳に響いてきたから。

2 全員で演奏すると、個々の楽器の音色がだんだん調和のとれたものになっていったから。

3 全員で演奏することによって、巧みに演奏する人の音だけがひときわ目立っていたから。

4 全員で演奏すると、パート練習のときよりも音量が何倍にもふくらんで迫力があつたから。

(エ) —線4「ありありとイメージできる。できすぎる。」とあるが、このように思ったときの「千鶴」の気持ちを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 吹奏楽部が自分にぴたっと合っている気がしたので、これから始まる中学校での生活がどのように展開されていくのかが容易に想像できてしまい、それではつまらないと不満を抱えている。

2 吹奏楽部が自分にとっても合っていると知ってしまったことで、体育系の部活には向いていないという事実を改めて考えさせられてしまい、今までと違う自分には変われないと悲しんでいる。

3 吹奏楽部という自分にとっても合った部活を見つけてうれしい反面、音楽にあまり親しんでこなかった自分が、中学校の吹奏楽部のレベルの高い練習についていけないのか不安に思っている。

4 吹奏楽部という自分にぴたりたりの部活を見つけて喜びながらも、こだわってきた体育系の部活ではなく、今までの自分とあまり変化のない部活を選んでしまうことにためらいを感じている。

(オ) —線5「けれど、この日は早かった。」とあるが、「しほりん」の返事が「早かった」理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「千鶴」の悩みを十分理解することができるので、どのような言葉をかければその悩みが解消されるかわかったから。

2 「千鶴」が自分と同じ部活に入ってくれば楽しく活動できると思い、すぐにでも一緒に入部したいと思っていたから。

3 「千鶴」が悩んでいることにはまったく共感できないが、今は友人をなぐさめて勇気づけておくべきだとわかったから。

4 「千鶴」の悩みに友人として気づけなかったことを悔やみ、その悩みの原因をつきとめてあげたいと思っていたから。

(カ) —線6「夕焼け空が朝焼けみたいに光りかたを変えた。」とあるが、この表現について説明したものと最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 必死に新しい自分になろうとしていた「千鶴」が、今はそのことよりも「しほりん」のような友だちを大事にするべきであると気づいたことを表している。

2 「千鶴」と「しほりん」を待ち受けている未来が必ずしも明るいものではないことを暗示し、できれば吹奏楽部に入らないほうがよいということを表している。

3 吹奏楽部に入ったら新しい自分にはなれないと思いきや、「しほりん」の言葉によって発想を転換して希望を見いだしたことを表している。

4 吹奏楽部への入部を決めたことによって、「千鶴」が体育系の部活に入って生まれ変わろうという強いこだわりの気持ちを捨ててしまったことを表している。

(キ) —線7「そうならいいな。」とあるが、「千鶴」はどうなることがいいと思っているのか。次の条件を満たし、全体で三十字以上四十字以内の一文で書きなさい。

書き出しの「自分らしいことをして、」という語句に続けて書き、文末は、「なること。」で終わること。これらも全体の字数に入れること。

問三 次の①・②の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

①春、満開の桜を見て「きれいだな。」と思わず口にすることがある。あるいは、冬のよく晴れた朝、雪をいただいた真つ白な富士山を遠くに見て、やはり「きれいだな。」と誰しも思うのではないだろうか。A、昔の歌に「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」(在原業平)と歌われているように、花の咲く前からいつ咲くかどうかソワソワし、咲いたら咲いたでいつ散るかハラハラするのは、桜があるからで、いつそ桜がなかったらもつと落ち着いた気分です春を迎えられるのに……というちよつと「天の邪鬼」な気持ちも理解できる。実際、あまりにもきれいなものは、人の心をかき乱す原因ともなるからである。

「天の邪鬼」と言えば、桜や富士山のように昔から多くの人たちに愛でられてきたものは、そのためにかえってあたりまえに思えて、桜よりも梅の方がいいとか、富士山よりも噴煙を上げる荒々しい桜島や浅間山の方がいいという人もいる。また、梶井基次郎のように、桜の樹の下には死体が埋まっていて、花の妖しいまでの美しさはそのせいだと物騒なことを考えたり、葛飾北斎のようにありきたりの富士山に満足せず、細長い富士山や朝焼けの真つ赤な富士山を描いたりして、伝統的・定型的な桜や富士山のイメージに異議を唱えたのも、おそらく同じ理由からだろう。

①同じことは、自分自身の体験にもあるのではないだろうか。友人が少年野球団に入っておそろいのユニフォームを着ているのを見て、うらやましいと思う一方で、野球なんかサッカーに比べるとダサイから自分は野球のユニフォームなんて欲しくないと、やせ我慢をしたことがないだろうか。

ものごとの価値は、そのもの自身だけでは決まらず、時代や文化、そしてさまざまな人間関係によって異なってくるというのは一面の真実だろう。そこから、すべての価値は人それぞれだと考えたくなるかもしれない。けれどもそう考えはじめた途端、今「きれいだ。」と自分が考え主張する基準を失うことになる。というのも、少なくとも今自分自身「あれではなくこれがきれいだ。」と考える基準を、たとえば言葉で表現できなくとも何らかの形でもっているから、そう主張できるのではないだろうか。そうでないと、自分の「好み」が変わったとか、よくなったとかいうこともできなくなる。

考えてみれば、普段きれいだと思っているものが、「どうしてきれいなのか。」改めて聞かれて、答えられないのはむしろ自然なことである。ただそうした普段自分でも気づかない身近な好みの「違いと境界」に注意を向けることで、自分を取り巻く世界の見方も、少し変わってくるのではないだろうか。そのことで、流行や世間の評判に一方的に引きずられることなく、ものそのものと向き合えるようになるかもしれない。その意味でも、「天の邪鬼」や「やせ我慢」は大事である。そうしたもうひとつ別の見方を通して、きつと世界は今までとは違った姿を現すことだろう。

(神崎 繁「『天の邪鬼』の勧め」から。一部表記を改めたところがある。)

②カラフルな服や靴、リボンやネックレスといった身に着けるもの、俳優や歌手、さらには友人や子ども顔や姿が、華やかで整っているときに、人は心惹かれて思わず「きれいだな。」と眩く。夕焼けの微妙に変化する赤さや、穏やかにたゆたう海原の青さに対して心惹かれてそう眩くこともあるだろう。華やかであることと整っていることが同時に示されるということがきれいなものや人の特質である。

③きれいなという言葉は、たとえば「きれい好き」というような表現において示されるように、整理整頓がなされていて、清潔な状態を示す場合もあるけれど、そのような意味でたんによこれがないという状態は、



華やかさを欠いているから、思わず「きれいだな。」と眩くような魅力をもたない。他方、華やかではあるけれども、整った秩序、端正な均衡(注)といったものを欠いているときには、きれいという言葉をもらすことができない。華やかさの刺激が強すぎ、ときに眩暈(めまい)のようなものを感じてしまつて、それを愛でることができなくなる。クリスマスの飾り付けが過剰になりすぎたり、あまりに多く打ち上げられた花火が乱舞するとき、きれいを通り過ぎて派手なものとなつて、悪趣味と言わざるを得なくなるように。華やかさと整っていることに加えて、きれいなものには、それを愛でるに相応(ふさわ)しい適切なサイズが必要である。万華鏡(まんげきょう)の華麗にして整った小さな世界こそきれいなものの典型だろう。

**B**、きれいなものや人はかわいいものと近さをもっている。盆栽からフィギュアにいたるまで、私たちの文化においては、小さなものに宿る端正な均衡といったものへの偏愛が存在するとはよく言われることだが、そういった小さなものの世界のかわいらしさを愛でる感性が、きれいなものや人を私たちが褒める仕方を方向づけている。何かをいいと感じることは、無垢(むく)な感性が自由に働くことではなくて、それぞれの文化が育んできた共通の感性に基づくことだから、小さくてかわいいものへの偏愛という私たちの感じ方をむげ(注)にすることはできない。

だけれども、小さなもの、端正な均衡への偏愛はときにせせこましさと窮屈さをもたらさないだろうか。きれいという表現ほどは日常において用いられない言葉がある。美しいという言葉である。美しいという言葉をもらす瞬間は日常においてそうあるわけではないが、美しいものや人との出会いは、出会った後の生き方を大きく変える。典型は、自分を包み込むような自然の姿、まっすぐな生き方を体現するような人のすっとした立ち姿、そして、音楽を始めとする芸術だと思ふ。愛でるのではなく、自然やその人や音の織り成す空間へ思わず連れて行かれる経験をもったときに美しいという言葉はもれる。きれいなものはいつも飾りに過ぎない。飾りとしてのきれいなものを愛でて遊ぶことも大切だが、本当に大切なものとの出会いは美しいものや人がもたらす。子どもが大人になりかけるときに恋愛が大きな役割を果たすのはその好例である。

(鈴木 泉「飾りとしてのきれいなものから美しいものへ」から。一部表記を改めたところがある。)

(注) 在原業平 平安時代初期の歌人(八二五～八八〇)。

天の邪鬼 わざと人の言うことに逆らうひねくれ者。

梶井基次郎 小説家(一九〇一～一九三二)。

葛飾北斎 江戸時代後期の浮世絵師(一七六〇～一八四九)。

たゆたう ゆらゆらとゆれ動く。

端正な均衡 きちんとしていてつりあいがとれていること。

無垢な まじりものない。

むげにする かえりみない。

(ア) 本文中の **A**・**B** に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- |     |      |   |      |     |     |   |     |
|-----|------|---|------|-----|-----|---|-----|
| 1 A | むしろ  | B | また   | 2 A | つまり | B | すると |
| 3 A | ところで | B | なぜなら | 4 A | けれど | B | だから |

(イ) —線1「同じこと」とあるが、その内容を説明したものととして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 多くの人々が賞賛するものに対して反発心や対抗心をもつこと。
- 2 ものごとの価値を時代や文化に応じた基準によってとらえること。
- 3 誰もが美しいと思うものを自分も同じように美しいと思うこと。
- 4 伝統的なイメージに異議を唱えることはよくないと考えること。

(ウ) —線2「『天の邪鬼』や『やせ我慢』は大事である。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 「天の邪鬼」や「やせ我慢」によって、流行や世間の評判にまで視野を広げ、それらを自分の見方に生かすことができるから。
- 2 「天の邪鬼」や「やせ我慢」によって、伝統的・定型的な世界のもつイメージを損なうことなく守り通すことができるから。

3 「天の邪鬼」や「やせ我慢」によって、自分を取り巻く世界の見方が変わり、ものそのものと向き合える可能性が生まれるから。

4 「天の邪鬼」や「やせ我慢」によって、ものそのものにとらわれることなく自由な発想で世界と向き合える可能性が生まれるから。

(エ) —線3「きれいという言葉」とあるが、人が「きれい」という言葉を口にするのは、対象がどのような状態であるときか。それを説明した次の文中の **I**・**II** に入れるものとして最も適するものを、**I** については四字の語で、**II** については三字の語で、**2** の本文中からそれぞれ抜き出し、そのまま書きなさい。

たとえば装飾品や人の容姿などがもっている **I** と整った秩序に加えて、それを愛でるに相応しい適切な **II** であるときに、人はきれいという言葉をお口にす。



問四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

和邇部用光(注)といふ楽人ありけり。(高知県の土佐神社の祭りに行って、都へ帰るときに)土佐の御船遊(ある港)びに下りて、上りけるに、安芸の国、なにがしの泊(殺されてしまうだろうと)にて、

海賊押し寄せたりけり。弓矢の行方知らねば、防ぎ戦ふに力なくて、今はうたがひなく殺されなむ(殺されてしまうだろうと)と思

ひて、(注)筆(注)策(注)を取り出でて、(船の屋根の上イ)屋形の上(海賊たちよ、今はもうどうしようもない)にゐて、「あの党(早く)や、今は沙汰(早く)に及ばず。とく何物をも取りたまへ。

ただし、年ごろ、思ひしめたる筆策(注)の小調子(注)といふ曲、吹きて聞かせ申さむ。さることこそありしかと、(このようなことがあったぞと)

のちの物語にもしたまへ。」(注)といひければ、宗徒(注)の大きな声にて、「主(お前たち)たち、しばし待ちたまへ。(注)かくい

ふことなり。もの聞け。」といひければ、船を押さへて、おのおの静まりたるに、用光、今はかぎりとお

ほえければ、(注)涙(注)を流してめでたき音を吹き出でて、吹きすましたりけり。(澄んだ音色で吹いていた)

(時もよかつたのか)をりからにや、その調べ、波の上にひびきて、かの潯陽江(注)のほとりに琵琶(注)を聞きし昔語りに異ならず。

海賊、静まりて、いふことなし。

よくよく聞(注)きて、曲終はりて、先の声にて、「君が船に心をかけて、寄せたりつれども、曲の声に涙落

ちて、かたさりぬ。」とて、漕(注)ぎ去りぬ。(ここはやめた)

猛(注)きもののふの心をなぐさむること、和歌には限らず。これらみな管絃(注)の徳なり。

〔十訓抄〕から。

(注) 楽人 雅楽 (宮中や貴族の間で行われてきた音楽) を専門的に演奏する人。

安芸の国 今の広島県の西部。

筆策 雅楽で用いる管楽器。

小調子 筆策で演奏する曲の名前。当時「秘曲」として扱われていた。

宗徒 多くの人々の中で中心となっている者。ここでは、海賊の頭を指す。

潯陽江のほとりに琵琶を聞きし昔語り 昔、川のほとりで白楽天という詩人が、琵琶の音に感

動して詩を作ったという話。

(ア) ~~~~~線ア〜エの中から、他と主語が異なっているものを一つ選び、その記号を書きなさい。  
(イ) —線1「防ぎ戦ふに力なくて」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 弓矢の置き場所がわからなかったから。
- 2 都に帰るべき急ぎの用事があったから。
- 3 船遊びで疲れて力が出なかったから。
- 4 武器の扱い方を知らなかったから。

(ウ) —線2「かくいふこと」とあるが、その内容を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 「用光」が、小調子という曲を吹いて聞かせるので、後の世に語り伝えてほしいと願っていること。
- 2 「用光」が、小調子という曲を聞きたいので、海賊に誰か吹ける者がいないかと尋ねていること。
- 3 「用光」が、小調子という曲を吹いて聞かせる代わりに、命を助けてほしいと頼んでいること。
- 4 「用光」が、小調子という曲にまつわる話を聞かせる間は、静かに待つてほしいと祈っていること。

(エ) —線3「涙を流してめでたき音を吹き出でて」とあるが、その意味として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 皆が静まりかえっている中で演奏できることに感激し、涙を流してめでたい音楽を演奏して命が尽きる今となっては筆筆を吹くのも最後と思い、涙を流してすばらしい音を吹き始めて
- 2 自分の最後の願いがかなえられたことに心から満足し、涙を流してめでたい音を吹き始めて
- 3 名曲の演奏に必要な技を伝えられる最良の機会と思い、涙を流してすばらしい音楽を演奏して
- 4 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 万一の事態に備えて、日頃から自分の専門外の知識を身につけておくべきであるということ。
- 2 どんなときでも冷静に対処して、相手の心に訴えかける手立てを考える必要があるということ。
- 3 音楽には、たとえ荒々しい心の持ち主であっても、その心を動かす力があるということ。
- 4 昔語りの中の教訓を、現在の状況に生かすことによって、必ずよいことが起こるということ。

(問題は、これで終わりです。)

